

SHOW HEY シネマルーム

★★★

世界一団の博物館

2003年

企画・製作：劇団★世界一団

2003（平成15）年8月9日鑑賞

Data

舞台監督：武吉浩二

作・演出：ウォーリー木下

出演：平林之英／希ノポリコ／小松
利昌／年清由香

👁️👁️ みどころ

全然ストーリーも分からず、劇団も役者の名前も知らない演劇だが、興味本位で出かけてみた。物語は複雑怪奇。3つの博物館での3つのストーリーが錯綜する。そして一貫して狭い舞台上で走り回り、逃げ回るドタバタ劇。キーワードは「同級生」だが、ちょっと凝りすぎか・・・？もっとも、若い役者諸君の頑張りには拍手！

—— * —— * —— * —— * —— * —— * —— * —— * —— *

<3つの博物館が舞台>

舞台となる3つの博物館とは、時代、場所、テーマの異なる次の3つ。すなわち

- A 1988年、日本／東京・国立科学博物館。
- B 1995年、日本／長野・夢の博物館。
- C 2003年、ドイツ／ハーメルン近郊ブルンスウィック城・人体切断博物館。

<3つのグループが錯綜する不思議な世界>

1988年、東京の国立科学博物館に来たのは、中学生の修学旅行生。主役は仲良しの3人組男子生徒。しかし彼らはクラスの悪ガキから、博物館へ忍び込んで「恐竜のしっぽを切り取ってこい」ととんでもない「指令」を受けてしまった。

1995年、日本／長野・夢の博物館。これもワケの分からないヘンな博物館。カンガルーの縫いぐるみを着た女の子と、この博物館に迷い込んだ1人の男性が、あの映画の主人公「インディ・ジョーンズ」とその助手と共に、何が夢か何が現実か分からない奇妙な物語を展開する。

そして2003年、ドイツ／ハーメルン近郊ブルンスウィック城・人体切断博物館。この博物館の隣にある中世のお城には、日本でいったんは成功しながらスランプに陥った女性作家が1人で(?)住んでいる。そしてこの作家の取材に訪れた女性記者との間で、これも奇妙な物語が展開される。

この3つの博物館と3つのストーリーを繋ぐキーワードが「同級生」。つまりあの修学旅行の時の「あいつ」や「あの子」が、それぞれ今は、どこで何を・・・。

＜大きな椅子とパネルが大活躍の舞台には＞

開演前、3m以上の背もたれのある、直線的なデザインの木製の椅子が数個置かれている。この椅子が最初から最後まで大活躍。そしてベニヤ板と同じ大きさのパネルが数枚。これも大活躍だ。そして小道具は懐中電灯。最初の字幕の点灯から博物館への忍び込みの道具、そして中学生の補導に警察官がつかうパターン等々、終始一貫大活躍だ。

＜出演者も汗ダクのドタバタ劇＞

上演時間は途中休憩なしの2時間10分。この間出演者は、ほぼ全員がフル稼働。すなわち、3つの博物館において相互に何ら脈絡のないストーリーが展開されるが、「主役」が登場している間は、他の役者はすべて同じ衣裳のまま、椅子とパネルの移動役という大道芸屋さんを兼ねて、それぞれが大奮闘。

さらに、当面「主役」となっている役者も、狭い舞台の上をとにかくよく走り回り、逃げ回り、さらには格闘したり、撃ち合いをしたりと大忙しだ。冷房が効いた部屋の中での上演だが、役者はみんな汗びっしょりだろう。

＜演劇の裾野の広がり期待＞

私は基本的には演劇よりもミュージカルなど音楽のある方が好き。そして演劇でも、あまり理屈っぽいものはイヤで、どちらかというと単純な感動作の方がスキ。そういう私の基準（ものさし）からすれば、この作品はどちらかというと、ワケが分からない、凝った印象が強く、あまり好きな作品とは言えない。

しかし、若い役者たちの頑張りには大いに感心。元気がないといわれる今の若者たちも、スキなことには一生懸命取り組んでいるんだなあということがよく分かり、ちょっと安心だ。

2003（平成15）年8月12日記